

北海道の子ども達の体力低下

昨年9月から10月に、小学5年生と中学2年生を対象に平成23年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査を実施して、その結果が北海道教育委員会より報告された。子ども達の体力・運動能力について、体力合計点は、小中学生男子は前年度より若干増加したが、女子は前年度とほぼ同じだった。しかし、いずれの数値も前回の全国平均を下回っており、北海道の子ども達の体力は低い。前年度を上回った種目は握力とソフトボール投げ等であった。前年度を下回った種目は長座体前屈、立ち幅とび、50m走等であった。体格は身長と体重で前年度を上回り、肥満傾向児の出現率は前年度の全国平均を上回っていた。生活習慣の状況調査では、朝食の摂取状況は「毎日食べる」と回答した割合が低く、1日のテレビの視聴時間が「3時間以上」と回答した割合が高かった。運動習慣の状況調査では、運動部やスポーツクラブに「入っている」と回答した割合が低く、運動やスポーツの実施頻度が高いほど、体力合計点が高かった。

北海道の子ども達の体力が低いのは運動が苦手な子どもが多いためと思われる。肥満傾向児に対して、生活習慣病の発症予防対策として、早い時期からの運動習慣や生活習慣の指導が必要になる。昔のように広場でガキ大将が中心になり、小さい子も大きい子も、一緒になり夕方まで外遊びをする姿は見られなくなってしまった。共働きの家庭が増え、両親は時間が取れなくなり、子ども達も習い事や塾通いで忙しく、公園に熊が出没して危険となり、外遊びが難しい状況である。子ども達が楽しく安全に外遊びできる環境整備や地域のボランティアの協力で親子参加型の体を動かすイベントの開催等が必要と思われる。

(和)



大通公園を望む窓辺から

縄文の心

この号が出ている頃には、北海道開拓記念館で『北の土偶展』が開催されている。「中空土偶」「合掌土偶」「縄文のビーナス」といった国宝級が多数展示される。縄文時代は、約1万年前から弥生時代の始まる紀元前4～7世紀頃までをいうのが通説である。人（ホモサピエンス）は20万～10万年前にアフリカ東部で誕生し、7～6万年前にアフリカを出て世界中に広がった。中東を経由し東へ向かったグループは、ヒマラヤ山脈の南と北に別れ、インドシナとシベリアまで到達した。北回りの集団は低い鼻・扁平な顔・一重まぶたなど耐寒性を獲得した（新モンゴロイド）。インドシナに至った色黒・二重まぶたで彫の深い顔立ちの（古モンゴロイド）集団は、中国南部から東アジアへと進み、南方から日本列島にたどり着き、一部は地続きだったサハリンから北海道に入った。こうして南と北から旅の終着駅・日本列島に定住したのが縄文人である。ちなみに弥生人は、寒さに順応した新モンゴロイドだ。

縄文時代は、狩猟採集・漁労が生活の基本であり、文字はなく貧富の差もなかった。すべてのものに靈魂が宿るというアニミズムの生命観で暮らしていた。この日本人のDNAに組み込まれた自然への畏敬は、稲作・漁労の弥生時代、その後の歴史時代を通して連綿と流れ続けた。

『何ごとの おわしますかは 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる』。西行法師が感じたSomething Greatを、ふと感じることがないだろうか。縄文の1万年の間には、地震も津波もあったであろう。彼らはこれらを、いかに受け止め乗り越えたのであろうか？はるかなる時空をワープした「合掌土偶」を観に行こう。大震災に途方に暮れる現代人に、何かを語りかけているかも知れない。

(麻鳥)